2024.02.10（土）

特別史跡熊本城跡　備前堀発掘調査現地説明会資料

熊本市文化市民局熊本城総合事務所
熊本城調査研究センター

はじめに

備前堀は熊本城の本丸の南側に位置する、城内唯一の水堀です。平成28年熊本地震で被災した石垣を復旧するために発掘調査を実施しました。

１．調査の目的とその方法

今回の発掘調査は、平成28年熊本地震で大きく崩落した備前堀東側石垣の復旧に際して、石垣と堀を保護するためにその本来の形状を把握することを目的として実施しました。備前堀は昭和63年（1988年）に浚渫工事を行っており、その際に今回の調査箇所を掘り下げて、石垣根元を確認していることが写真で分かっています。今回の調査では堀の水を抜いたのち、正確な記録を残すために同じ場所を再度掘り下げて、調査を実施しました。

２．調査期間

令和6年（2024年）1月～2月

３．備前堀と白川

白川は現在では熊本城の700mほど東側を流れていますが、江戸時代の絵図の表現から、かつては熊本城付近まで大きく蛇行していたと考えられます。その後、慶長15年（1610年）頃までに城下の整備に合わせて流路を直線化したものと推測されていました。昨年度、堀の浚渫工事の際に堀底の土が南と北で異なることが確認され、これが白川のかつての流路の痕跡であると考えられます。さらにボーリング調査の結果や周辺の地形から、竹の丸から飯田丸付近まで大きく河道が入り込んでいたと推測され、備前堀はこの旧河道を利用して堀として整備したものと考えられます。

４．調査成果

<u>①石垣を築く際の基礎工事の様相を確認</u>（調査地1、調査地3、調査地4）

⇒地山を1段掘り下げて（根切り）根石（石垣最下段の石）を据えていることがわかりました。
また、根石の据え方に2種類あることがわかりました。

1. 調査地1では根石を据えるために「根切り」後、地山上に直接根石が据えられていました。
2. 調査地3と調査地4では、「根切り」後に約15～30㎝の栗石（ぐりいし）を敷き、その上に根石が据えられていました。
   根石を据えた後、築石の前面は栗石で埋められていました（調査地2、調査地4）。

<u>②石垣の修理の痕跡と考えられる部分を確認</u>（調査地1、調査地2）

⇒根石の1段上から約50㎝奥にずらして積んでいます（図1参照）。

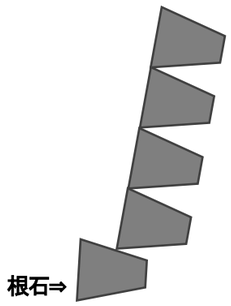

図1：②石垣模式図

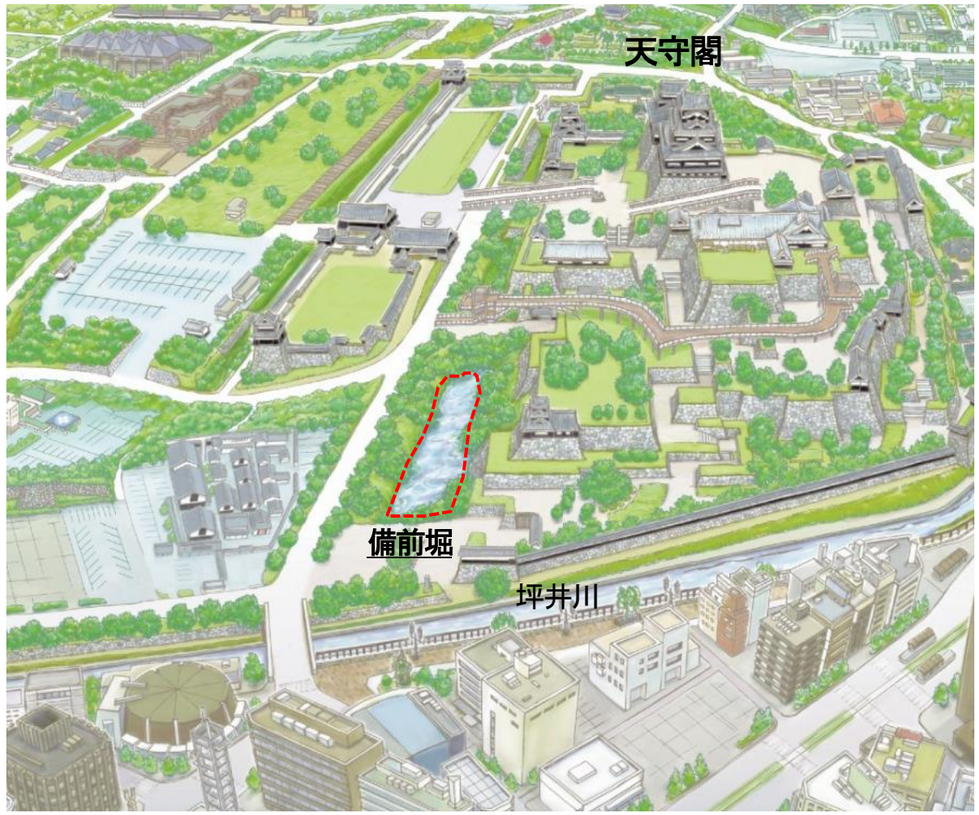

図2：熊本城鳥観図（南から。赤い破線で囲んだ部分が備前堀です。）

写真1：堀内の水を抜いた状態の備前堀

（南南西から撮影　発掘調査は赤色で示す4か所で行っており、手前から順番に番号をつけています。）

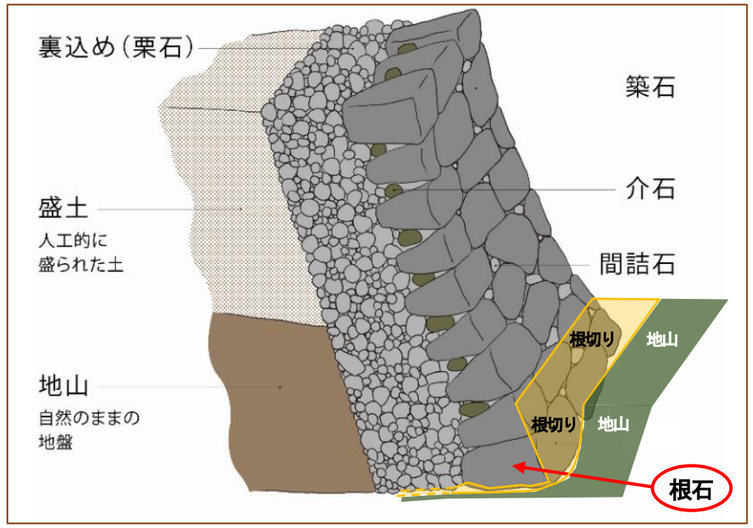

図３：石垣断面模式図

石垣の一番下の「根石」（ねいし）は、根切り（地面を一段掘りこむこと）後に据えられ、その前面は土や石で埋め戻されるので、通常は見ることができません。

今回の発掘調査では、この根切り後の根石の据え方に2種類あることを確認しました。

写真４：調査地２根石確認状況（西から撮影）

調査地２では、２つの根石（黄色の破線）を確認することができました。調査地２の周辺は昭和 63 年の浚渫工事で大きく切り下げられているためか、検出した根切りの深さは、ほかの調査地より浅くなっています。

写真２：調査地１根石確認状況（西から撮影）

調査地１では、黄色の破線で囲んだ４つの根石を確認できました。根石は根切り後の地山の上に直接据えられています。

また、調査地の南と北の断面では根切りの幅が異なり、北側のほうが広いことがわかりました。

写真３：調査地１北壁と根石（南から撮影）

調査地１の壁面では、根切り（黄色の実線）後に、根石を直接地面に据えています。築石の前面には土や石で複数回にわたって埋めていることがわかりました（黄色の破線）。

また、写真右の石垣は、２段目から上の石は根石の真上ではなく、50 cmほど奥に下げて据えられていました。

写真５：調査地３根石確認状況（西から撮影）

調査地 3 では、2 つの根石を確認しました（黄色の破線）。根切り後、根石の下に約 15～30 cmの栗石（ぐりいし）を敷き、根石を据えています。また、根石同士の間に生じた隙間には大きめの石を挟み込んでいます。

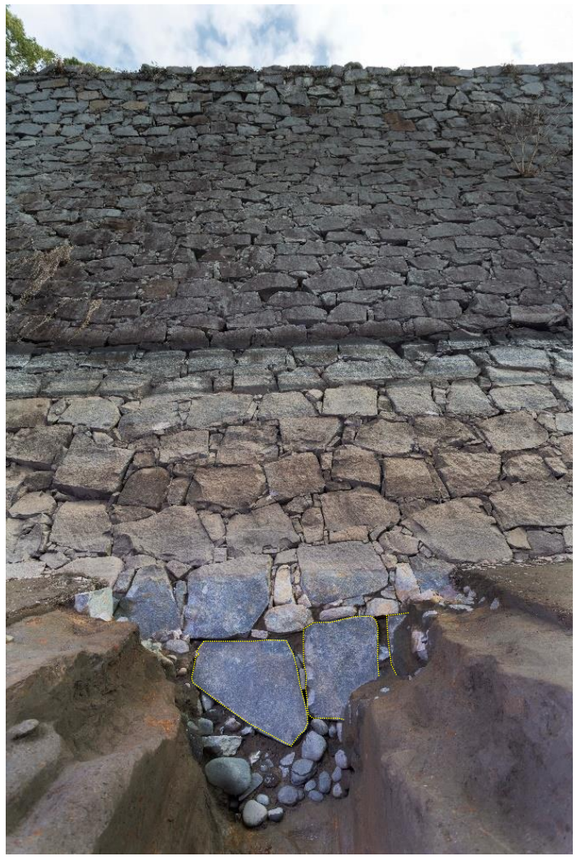

写真６：調査地４根石確認状況（西から撮影）

調査地４では、3 つの根石を確認しました（黄色の破線）。根石はとがったところを下に向け、平らなところが上になるよう据え付けられています。調査地 3 の根石と同じく、根切り後の地面に約 15～30 cmの栗石（ぐりいし）を敷いた上に据えられています。